

日本の大学図書館における分類の変更 — 京都大学の事例より —

檜崎 羽菜

2015年、日本十進分類法（以下、NDC）の改訂がなされた。その改訂によってNDCが分類体系に課題を抱えており、次回の改訂では大幅な分類体系の変更が不可欠であることが明らかになった。一方で独自分類の維持の困難さからNDCや国立国会図書館分類法（以下、NDLC）に分類を変更した図書館もある。

本研究では、京都大学附属図書館（以下、附属図書館）と京都大学吉田南総合図書館（以下、吉田南総合図書館）における分類変更の過程を明らかにしていく。研究目的は、大学図書館で分類変更を行う際の参考事例を明示し、分類表の特徴をつかみ、今後の分類変更に役立てることである。これらの2館における分類変更に着目した理由は、2点ある。1つ目はこの図書館が大規模で広範囲の専門分野に及ぶ蔵書構成であること、2つ目は独自分類表からNDCやNDLCといった一般分類表への変更が行われたことである。附属図書館は京都大学の図書館・室の中で最大規模であり、1983年に京都帝国大学図書館和漢書（洋書）分類法からNDLCへと分類を変更した。一方で吉田南総合図書館は組織の改編により教養部図書館から改称されたため、教養学部に対応する蔵書構成となっている。ここでは、1987年に教養部和図書（洋図書）分類表からNDCへと分類を変更した。

本研究では文献調査に加えて、現職の京都大学図書系職員と1980年代に附属図書館または吉田南総合図書館（当時の教養部図書館）の勤務経験者を対象に、質問事項を作成し、メールでのインタビュー調査を行った。調査の結果、附属図書館ではNDC、NDLC、デューイ十進分類法、LC分類表、国際十進分類表が、吉田南総合図書館では、NDCとNDLCが候補として検討されていたことが明らかになった。また、附属図書館では図書館の建物の新営と目録業務の電子化への見込み、独自分類表の維持の困難さ、分類作業の難易度の向上が分類変更に至ったきっかけとなった。吉田南総合図書館では、系統的ではない分類表の維持の難しさ、明文化された分類規定がない状態での分類作業による分類記号の個人差、目録業務の機械化に対する展望が分類変更のきっかけとなった。

分類法の選択過程において、附属図書館はNDCに体系変更や将来性への疑問などの課題からNDLCを採用した。吉田南総合図書館でもNDCの課題は問題視されたが、より一般的に普及している分類表ということでNDCを採用した。この結果には図書館の特性が反映されていると考えられる。また、分類変更の契機として独自分類表の課題と目録業務の機械化に対する期待が両館であげられている。このことから分類変更には契機が必要であることがわかる。本論文では、京都大学の事例のみの言及となったが、同様の背景を持つ分類変更に関する事例の研究をすることで目録業務の機械化や独自分類表の限界に際して大学図書館がどのように対応したのかを知ることができると考えられる。

（指導教員 逸村裕）